

新聞にこんな記事が掲載されていましてので ご紹介します。(続編) レイアウト変更

日 新 聞 2021. 8. 26 朝

〔第3種郵便物認可〕

らしナビ

社会保障

## 路上の出会い自立の支えに

2歳の時から過ごした児童養護施設での「職員による虐待」を明るみに出した尾中祐樹さん(22)。18歳で自立すると、これまで信頼し、「お母さん」と呼んできた施設職員との関係性も変わってしまった。頼る先がなく、自暴自棄になった自分を変えたのは、路上生活での出会いだった。

### 虐待 そのあと

— 親から離れた私の願い —



施設で受けた傷 下

高校3年の時、検査で「顔面肩甲上腕型筋ジストロフィ」と分かった。少しずつ顔や肩、腕の筋力低下が進む、国の指定難病だった。実感がわかないまま、力仕事をやる土木建築会社への就職を決めた。周囲に止められることもなかった。

高校卒業と同時に、施設職員である「お母さん」が切り盛りするファミリーホームを出て、自立。1人暮らしを始めた。しかし、職場になじめず、孤立した。連絡を取るようになった美母とも関係が悪化し、SNS(ネット交流サービス)に「産まなきゃよかった」と書き込まれた。「生きるために働かなければならないなら、働かないで死にたい」と思うようになった。

### ●「お母さん」との壁

「お母さん」に電話し「仕事

の対象外。できることがない。頑張ってほしい」との返事だ

支援者から生活用品を提供してもらい1人暮らしができるようになった尾中祐樹さん—東京都内で、丸山博撮影



### ●新宿の高架下で

ホームレスが多いと聞き、JR新宿駅の高架下にとどり着いたのは昨春秋。飲食店から出たごみの中から食べられる物を探し、公衆トイレの洗面台の水を使って、時々体をふいた。役所の職員に生活保護を勧められたが、断った。自暴自棄だった。

転機は、路上での出会いだった。動画配信サイト「ユーチューブ」にホームレスを題材とした自作の動画を投稿している人から声をかけられた。自分の半生と「施設内虐待」の告発のインタビューが配信されると、高校生から「我が子と同じ難病」という親世代まで、視聴者が次々と高架

下を訪れるようになった。動画は支援団体の目にも留まり、埼玉県への虐待通告にもつながった。今後のことを、少しずつ考えられるようになった。

尾中さんは言う。「どんな自分でも受け入れてほしくて(職員に)求めすぎていた。『お母さん』って言葉は子どもには特別だけど、学校の先生みたいなものだったんだ。今でも「心の中では『お母さん』と呼んでいる」が、もう連絡を取るつもりはない。記者は「お母さん」だった職員に少したけ話を聞いた。取材は「控えたい」としつつ「本当に楽しみに尾中くんを世の中に送り出した。行き違った部分もあるが、温かい気持ちで見守りたい。かけがえない存在であったことに偽りはありません」と語った。

### ●新たな住居を得る

今年の春先には、生活保護の受給を決め、住居を得た。今後、施設側が虐待を認めなければ、仲間と訴訟を起こすことも考えている。これから障害者手帳を取得し、就職活動をするつもりだ。冷蔵庫に張られたシールには、大きな文字で「社会復帰を頑張る!」と書き添えていた。

【谷本仁美、黒田阿紗子】

◆ 連載「虐待そのあと」は毎日新聞のニュースサイト「医療プレミア」で全文を読むことができます。